

『なんとなくわかる茶の湯』 発売記念本

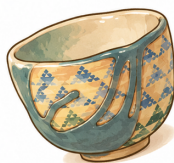


なんとなくわかる す き しや 数寄者



第一服

—ヲタクな咄を集めてみた—



高山カツヒコ

戸部和久

長野埜志

依田徹

川上宗雪

濱崎宗清

藤丸阿弥

有巢弘城

竹口敏樹

中里健太

近藤康代

阪口公子

赤木明登

田村正文

伊野孝行

宇田川宗光

目次

前夜祭

開会のあいさつ

茶人のコミケ

宇田川宗光――4

イベント1日目 虚実古今の数寄者たち

転生しても数寄者だった件

高山カツヒコ――10

極付数寄者転生

戸部和久――28

湯沸噺

長野埴志――52

原哲夫の千利休像

依田徹――63

何かにハマり過ぎる人にお勧めする茶の湯（沼）の世界

川上宗雪――73

パリピ天皇のゲーム、音楽フェス

宇田川宗光――80

イベント2日目 モノガタリを届ける

グラスの中の源氏物語

濱崎宗清――84

キミに届け☆迷菓誕生

藤丸阿弥――94

日本酒のスイッチ ―ラベルの読み解き方―

有巢弘城――105

その日その時その場所でのペアリング

竹口敏樹――131

Re:ゼロから始める御茶碗生活

中里健太
――
145

どれ見てドレミの練習

近藤康代
――
155

茶室の景色――はつりを愛でる

阪口公子
――
167

touch

赤木明登
――
174

祭りを終えて

有明の月

宇田川宗光
――
190

数寄者図鑑

――
192

□ビッグサイト・外観

シートカットのソーワが建屋を見上げ、
ソーワ「ここがビッグサイト！数数多の
数寄者が跳梁跋扈する日本の魔窟！」

字幕「ソーワ 高校1年」

『北の大萌会』の看板を見て、

ソーワ「(引いて)うわー……本当にここ借り
たんだ……自分でイベント開催って、ヒデ
ヨシ生徒会長、なんてお金持ち……」

□回想・生徒会室

黒髪ロングのヒデヨシと、真面目メガネ
のリキユーが、ソーワに語っている。

ヒデヨシ、薄茶をいただきながら、

ヒデヨシ「ワタクシ気がつきましたのよ、ソ
ーワ君」

字幕「ヒデヨシ 高校3年 生徒会長」

ソーワ「何にですか、会長？」

ヒデヨシ「とどのつまり……『茶の湯』と言
うのは、現代で言うところの『オタク趣味』

20

15

10
- 1 / 15 -

5

第一場 大祭島 北ノ宮の場

本舞台三間の内、正面背景一面、江戸湾の遠見。小屋掛けの出店、屋台など上下よろしくあつて、良き所に金色の華美なる小屋ある。都て大祭島北ノ宮大萌え会の体。

ト 誂えの萌え萌え神楽にて幕明く、数寄者の出展者に参加者の大勢が行き交う。すぐに床の浄瑠璃となる。

へ 東雲や かもめにゆられ 夢の洲 ちよつとびつくり 大祭島 萌え萌え出る大萌え目出度き 北の宮
そわそわ来る オタクの数寄者

ト 右の浄瑠璃の内、向こうより、宗和於多久介茶近が爛熱斎薪庵と共にやつてくる。

○ 珍念さん！

* はい和尚様、いかがなさいましたか？

○ 3年後に行うお茶会で使う釜を新しくしたいのですが、絵師を呼んで下さい。

* 畏まりました、本日馬の刻に絵師を呼びましょう。

実はこの和尚、お茶好きとして名高いばかりか、男色の道でもたいへんな評判で、その筋では知らぬ者が無いほどだったとか。

千当時、茶の湯道具は基本的にフルオーダーであり、注文主が絵師を呼び、注文主がアレコレ言うのを聞きながら、デザインを決めていったのです。

* 絵師の墨田西斎がみえました。

この度はご依頼ありがとうございます。してどの様な釜にいたしましょう。

○ 3年後の茶会は霜月になりますので、炉釜ですね・・・二分の輪口径は四寸に胴は八寸五分、丈は六寸といったところか、鐙付は獅子に立髪をつけて・・・模様ではなく縮緬膚に、蓋は共蓋で摘みは花卉の抱合せに猪目透かしでお願いします。

られたのである。

まず『花の慶次』における利休の登場過程を確認したい。前田利家（一五三八～一五九九）との不和から金沢を出奔した慶次は、秀吉のいる京都に入ろうとする。そして京都に入る直前に、利休の嫡男である千道安（眠翁、一五四六～一六〇七）の徒党と遭遇する。「千道安の巻」において、道安の共連れが「おらおらどけー!!」「道をあけろー!!」と昭和のヤンキーの様にふるまうのは、『北斗の拳』を彷彿とさせる原の得意とした表現である。そして慶次一行の間に悶着が起こると、道安は秀吉の権勢を誇示して慶次を屈服させようとする。続く「華の都初名乗り!の巻」では慶次は当然これを見せしめ、痛快な暴力によって道安一党を叩きのめした。さらに金銭で解決しようとする道安を、慶次は「子供」と言って打擲する。そして屈服させた道安に槍持ちをさせ、堂々と都に入るのである。

この道安が呼び水となって、利休が登場する。「茶聖 千利休の巻」において、利休は登場するや泣きつく道安に「木から降りてノコノコ子の喧嘩に出ていく親がどこにある!!」と一喝する。特筆すべきは、その体躯の大きさである。初登場のシーンでは、正座していながらも、立っている道安の倍の大きさがあった。この後も利休の体躯は継続して大きく描かれるが、迫力のある人物を非現実的に大きく描くのは、やはり原が『北斗の拳』において確立した表現である。

次の段では、利休は慶次を見ようと町に出ていく。そして借家の庭で桃を愛でている慶次を見

一方でお茶人さん達に見出され愛されてきた何気ない郷土菓子も時にお茶菓子としてお席に登場します。

また歴史を紐解くとお菓子の側面から思い掛け無い人物像を知ることもあります。茶の湯を大成した千利休さんはお茶菓子に“椎茸”や“昆布”を使い、これつてお出汁の後の・・・と筆者は思うのですが・・・利休さんと茶の湯を楽しんだ豊臣秀吉公はお菓子にまつわる逸話が多く、きつと食べるのが大好きな方だったでしょう。

お茶菓子とはお茶を一服戴く為のお菓子。

お茶席にお招きされて持ち帰ることが出来るのがお菓子とお茶。人の心に余韻を残してお菓子は儚く消えていきます。ご亭主が一生懸命点てたお茶に勝ちすぎ負けすぎず。

お茶席のとても緊張する場面でお菓子が御

亭主とお客様の心に寄り添い、仲を和らげ話の種になってくれたらと思いいながら日々お菓子を作っています。

何か少しでも和菓子の魅力が冊子にした方の元へ届きますように。

筆者 和菓子調整處藤丸 藤丸阿弥

令和八年七夕



ヒデヨシ「(夢心地)茶碗や茶入れと言った『お道具』を集めて
愛でるのは、円盤やフィギュア、アクスタや缶バッジ集めて愛でるのと同じ……」

ズイズズ

ソワ「(怪訝)ですか……?」

